能町みね子　エッセイスト

去年、私は初めて八戸ブックセンターを訪れました。何時間かなめるように本棚を見回し、高橋弘希さんのエッセイ「高橋弘希の徒然日記」を購入して、読みながら帰りました。デーリー東北に連載されたエッセイだそうで、とても気軽に楽しく書いている感じにうらやましさすら感じ、帰りの青い森鉄道の中でうっかり「東奥日報に600字くらいの連載持ちたい」とツイートすると、この思いつきのつぶやきが本当に実現し、私は東奥日報で連載を持つに至ったのです。

つまり八戸ブックセンターは、私と青森を間接的に仕事で結びつけた恩人（恩店）なのです。ありがとうございます！

さて、このたび、この寄稿をするために改めて八戸ブックセンターを訪れました。

音喜多所長、企画運営専門員の太田さんと熊澤さんに隅から隅まで見せて頂いて、断然気になったのは「カンヅメブース」です。

実際、最初に訪問したときから存在に気づいてはいました。奥まった場所に「こちらは執筆専用の部屋となっております。市民作家登録が必要です。」なんて札が出ていたら、書きものが本業である私としては気になります。でも、たぶん八戸市民しか利用できないんだろうなあ、と思ってあきらめていました。そんなことなかった。八戸市民じゃなくても使えるんですって。

最初に使用者登録をし、「八戸市民作家カード」を発行すれば誰でもOK。現在300名弱ぐらいの登録があるそうです。東京在住の人で、こっちに来たときに使うという人もいるらしい。このたび再訪した際、作っていきませんか？と誘われて二つ返事で登録しました。

公立図書館の机では中高生が勉強する姿ばかりが見られて、それも悪いことじゃないけれど、ここにあるのは勉強机ではなく執筆専用の机。「その名のとおり『カンヅメ』になって、書くことに集中できる部屋」だそうで、ジャンルを問わず、出版や発表を目標として執筆する人のための部屋なのです。10時から閉館まで、ほかに予約がなければびっちり使えて、しかも無料！なんて画期的な試み。

さて、カードを作ったんだから、使わなきゃ。

6月末のある日、私は仕事が切羽詰まっていたので、今だ、と思って八戸に飛んだ。つい数日前に案内してくれた音喜多所長たちにも一切連絡せず、一利用者としてアポなしで。

＊能町みね子さんがカンヅメブースをご利用して書いてくださったこの原稿の続きは、9月中旬発行予定の本のまちフリーペーパー『ほんのわ2022』で読むことができます。ぜひ、こちらも楽しみにお待ちください。

能町みね子　mineko nomachi

エッセイスト

フリーペーパー「ほんのわ」(2022)
能町みね子×津田大介プレミアムトーク「ポリタスTV」お盆SP! in八戸ブックセンター 公開収録会場観覧(2022)

1979年生まれ。2021年夏より青森県にプチ移住し、青森と東京の自宅を行き来する二拠点生活。エッセイ「ショッピン・イン・アオモリ」を東奥日報で連載中。最近の著書に『結婚の奴』(平凡社)、『皆様、関係者の皆様』(文春文庫)がある。執筆活動に加え、テレビやラジオでも活躍中。